

W-1

ワークショップ 1

危機方言のプロソディー

Prosody in Endangered Dialects in Japan

企画・司会 窪菌晴夫（国立国語研究所）

発表1 松浦年男（北星学園大学）

「天草市本渡方言における呼びかけのイントネーション」

発表2 白田理人（志學館大学）

「喜界島方言における動詞のアクセント単位の拡張と
真偽疑問文末のプロソディー」

発表3 五十嵐陽介（国立国語研究所）

「南琉球宮古語伊良部佐和田方言のアクセント体系の初期報告」

ワークショップの趣旨

本ワークショップは近年調査研究が進んできた日本語・琉球語の危機方言のプロソディーに関する研究成果を、語と文の干渉に焦点を当てて報告するものである。この問題は (a) 語が文に及ぼす影響と、(b) 文が語に及ぼす影響の2種類に大別できる。本ワークショップでは(a)の問題を主に発表3で、(b)の問題を主に発表1と発表2で論じる。

(a)の研究の代表例が、語アクセントの特徴が語や文節を超えたレベルで実現する現象である。たとえばHyman (2018)の研究によると、アフリカのニジェール・コンゴ語族に属するイジョイド語ブモ方言 (Ijoid language, the Bumo dialect of Izon) では、語レベルのアクセント(トーン)の対立が、複数の語を連結した時に初めて現れることがあるという。(1)の例では、「壺」「家」が単語発音では同一であるにも関わらず、文中に入れると違いが生じ、文全体の発音に影響を及ぼす。「壺」と「家」が持つ語レベルの音韻対立が、句や文という広い領域で初めて実現している例である。逆の見方をすると、語レベルの音調対立が、語の単独発音では中和してしまっている。

(1) イジョイド語ブモ方言

a. Aタイプ

bélé (壺)、bélé náná kímí (壺を持っている人)

b. Bタイプ

wárí (家)、wárí nàná kímí (家を持っている人)

日本語でも、東京方言ではいわゆる尾高型と平板型の違いが、(2)のように助詞を付けたら、(3)のように後続語句を付けると明確に現れる。名詞の単独発音で区別できるかどうかは話者によって、また語の長さによっても変わるようであるが、句や文の中に入れると両者の違いは明確である。語の単独発音で区別できない場合には、この環境でアクセントの中和が起こっていることになる。

(2) a.尾高型 ハ[ナ(花)、ハ[ナ]ガ(花が)、ハ[ナ]ダ(花だ)

b.平板型 ハ[ナ(鼻)、ハ[ナガ(鼻が)、ハ[ナダ(鼻だ)

- (3) a. ハ[ナ] ミ]ル (花見る)
 b. ハ[ナ ミ]ル (鼻見る)

以上のような現象は、語のアクセント特性が語を超えた領域一句、節、文一にまで現れてくるものである。これとは逆に、語が連結した時に語のアクセントが変わってしまう現象も観察される。その代表的な例が、英語などの強さアクセント（ストレスアクセント）の言語で報告されているリズム規則（*rhythm rule*）である。英語などでは、ある語のアクセント（強勢）が後続する語のアクセントと近接する場合に、前者が消えて（あるいは弱化して）してしまうことが知られている。たとえば(4)の例では、*Jàpanése*の主アクセント（-ése）が、後続する*péople*の*péo*との衝突によって消えてしまう。アクセント同士の衝突を避けるために、一方が消えてしまうのである。この結果、前半要素の*Japanese*や*New York*では主アクセント（主強勢）が消えて、第2強勢（*Jap-*, *New*）がその語の一番のプロミネンス（際立ち）として残ることになる。

- (4) *Jàpanése péople* → *Jàpanese péople*
Nèw Yórk Cítý → *Nèw York Cítý*

このように語を超えたレベルで語のアクセント構造が変容してしまう現象は、日本語でも観察される。たとえば近畿方言（大阪方言、京都方言）では、語句末モーラだけ高くなる語（いわゆる低起無核型）の音調が、後続する語句の出だしの音調によって変わる現象が観察される。1例をあげると、(5)の「眼鏡屋を」という語句は単独で発音すると句末の「を」だけが高くなる。この句末の高音調は、(5b)の「見る」のように低く始まる語句（低起式の語）が後続する場合にはそのまま実現するが、(5c)の「覗く」のように高く始まる語句（後起式の語）が続く場合には現れてこない。これは、「眼鏡屋を」の末尾の高音調と「覗く」の語頭の高音調が衝突して、前者が消えてしまう現象と見ることができる。(4)の英語の例では強勢の衝突を解消するために前の強勢が消えてしまったが、(5)の日本語の例では、高音調の衝突を解消するために前の高音調が消えてしまうという解釈である。強勢と音調の違いはあるものの、プロミネンスの衝突という点では共通している。高音調の衝突を避けて前の高音調が消えてしまう現象は、鹿児島方言の強調プロソディーや呼びかけプロソディーでも観察される（窪菌 近刊）。

- (5) a. メガネ[ヤ (眼鏡屋)、メガネヤ[ヲ (眼鏡屋を)、ミ[ル (見る)、[ノゾク (覗く)
 b. メガネヤ[ヲ ミ[ル (眼鏡屋を見る)
 c. メガネヤヲ [ノゾク、*メガネヤ[ヲ [ノゾク (眼鏡屋を覗く)

注

本ワークショップは国立国語研究所基幹型共同研究プロジェクト「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」と日本学術振興会科研費基盤研究(A)19H00530の成果を発表するものである。

文献

Hyman, Larry M. (2018) Towards a typology of postlexical tonal neutralizations. In Haruo Kubozono and Mikio Giriko (eds.) *Tonal Change and Neutralization*. 7-26. Berlin: Mouton de Gruyter.
 窪菌晴夫 (近刊) 『一般言語学から見た日本語のプロソディー—鹿児島方言を中心に—』くろしお出版。